
約束の木～世界の伝説と時の遺産～

Yui

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の木〜世界の伝説と時の遺産〜

【Nコード】

N8693A

【作者名】

Yui

【あらすじ】

世界の伝説碑文に書かれた歴史ページには、かつて、彼らは一つだった」と言い残されていた。人、光と闇。それは世界創造から千年の時も繰り返される血争いにより、この世は闇の魔界、光の幻界、人の世界という三つの世界に分かれた。だが、哀れと見た神は「時の魔術師」の存在を創り上げ、時と共に世界を再び一つとなり、彼らの心と安らぎの平和が一つとなって戦いを終わらせた。しかし、世界の伝説碑文にはまだ続きがあった……。

ブローグゝ世界の伝説（前書き）

「Under Another Sky」ユウイの旅」の作者であるYuiです。「Under Another Sky」ユウイの旅」とは別のファンタジー物語で、新たな冒険と世界が溢れる作品です。

プロローグ 世界の伝説

プロローグ

遙か昔々、神は世界をお創りなつた。人、光と闇の世界。かつて、彼らは一つだった。だが時は、力を欲望する者、無謀で血を飢え続ける戦いが生まれた。互いは嫌い合いながら争いと悲劇ばかり繰り返してきた。こうして、世には三つの世界に分かれた。闇の魔界、光の幻界、そして人の世界。しかし、それを哀れと見た神は一つの世界に戻すべく、‘時の魔術師’（Time Lord）の存在を作り上げ、こうして再び時と共に世界は一つになった。それは総合された世界、‘アルマーノ’。数千年も時を経て、世界の人族、^{ヒューマロ}魔界の魔獣族、^{マルバード}幻界の妖精族が平和に暮らす世界になった。

だが、時は世界に約束を果たさなかった。‘時の魔術師’の影から生まれた‘闇・時の魔術師’（Shadow Time Lord）。世を企み、そして恨み続ける‘闇・時の魔術師’は己でもある‘時の魔術師’を自ら生まれた影の世界に封印し、この世界に変わって降臨した。神にも抑えれない力を持った‘闇・時の魔術師’は影に染めようと、再び世界と族を引き離そうとした。しかし、神から選ばれた五人の賢者（God's Sage）は、その‘闇・時の魔術師’を封印すべく、己の魔力と魂を引き換えに、その者を影の世界に戻した。こうして、‘時の魔術師’は救われ、世界に平和を取り戻したのである。

その後、神に選ばれた五人の賢者達は、これらの出来事である‘世界の伝説’をその世間に伝えた。次の世代に名を残し、血が今日も流れる子孫達は封印に閉じた‘闇・時の魔術師’を見守り続けた。数百年後、影の存在である‘闇・時の魔術師’の封印が解かれる時

が来た。それは、ある者の力によって・・・。

ブローグゝ世界の伝説（後書き）

「Under Another Sky」ユウイの旅」と「安らぎの木」世界の伝説と時の神」という二つのファンタジー作品を同時に連載させていただきます。これからも頑張りますので、またよろしくお願いします。

第一話：始まり（前書き）

今日から第一話として、この作品をスタートします。

第一話：始まり

時は同じくして、数百年後のアルマーノの世界。広がる世界に、この静かな町に暮らす人族だけが住む‘ベリアーク（町）’がある。この町は、お金持ちであるゴルミの屋敷に住むゴルミ伯爵が仕切る家主だった。だが、治安が良いとは言えず、家主に町中で税金を高く取り上げられた挙句、その金を盗もうとする盗賊やごろつきなどが大半に住みついていて。今や屋敷内での警戒が厳しく、金や宝を盗もうとする大胆な者はいなかった。だが、その屋敷に宝を盗もうと覚悟を決めた一人の大胆な盗賊がいた・・・。

「よっしゃ！またただーき！」

沈黙に包まれた深夜。灯りのない高い建物のある窓から入り込んだ一人が大声で叫ぶと、いつのまにか奥の部屋にいた。宝や金目を捜す間、その時。ドアの外から別の足音がこちらに近づいてくる何者かの気配に気づいた。その人影は一瞬迷っていたが、素早くその場から立ち去ろうとしなかった。足音を殺してもさらに奥へと進もうとしたとき、突如背後から電燈の明かりがその影は照らされ、その人影は振り返った。そこには、警備員だと思われる年配の男がその人影の正体を確認すると、突然怒鳴るような大声で叫んだ。

「見つけたぞ！この、こそ泥棒が！盗賊めが、ぜったいに帰さぬ！」

「げ！やつベエ・・・。また見つかったか？」

照らされたその人影は、よく見ると身体全体に黒いマントを着て、フードを頭上に覆い被せた小柄の少年の姿だった。その怒鳴り声で思わず身をこわばせらた少年だったが、にやと微笑んだ。

「でも、いいもんーね。俺も、またじーさんの宝をもらっぞよ！」

少年は右のポケットから手を伸ばすと、キラキラと輝いていた石を持つ首飾りだった。その首飾りを見た年配の男は啞然と見て、一瞬

金縛りのように身体が固まった。相手に隙を見せてしまっても、年配の男は驚きの表情を浮かびながら、その首飾りを指した。

「な、なに？い、いつのまにー！？」

「へへ！隙ありつと！」

その少年はそう言い残すと、いつのまにかその警備員の脇に通り過ぎた。地面を蹴つても窓に向かって走った。それに気づいた年配の男は、「しまった！」と言うのも遅かった。からくも危機を逃れた少年は、手近な窓から外へと軽やかに飛び出した。もはや追いつけないと判断したその年配の男は壁についてあるボタンを叩くと、その同時に警報のベルが鳴ったのである。建物の中で眠っていた人々がそのベルの雑音の原因で起き上がり、明かりをつけて間もなく騒ぎ始めた。あの首飾りがあの盗賊少年に盗まれてしまった事を・

・。しばらくして、その建物から逃げた少年は高い枝から枝へと、飛び移ると急に立ち止まった。フードで顔を隠していたその少年の表情を伺えなかったが、後ろに振り返ると、口もとに勝ち誇った笑みを浮かんでいた。

「バーカ！あいつらなんかに、俺を捕まるかよ。さーて、この宝も価値あり？」

そう低くつぶやくと、少年はすぐに次の枝へと飛び移り、その場から逃げ出した。だが、その少年がさきほど立ち止まっていた枝の下に、茂みの物陰から、その様子をすべて見ていた人影があることに気づかずには。

朝の日差しが、町全体を照らす翌日。並び立つ建物を囲まれる町中の人々が多く姿を見せ、賑やかな雰囲気漂う。道端には、朝の市場が立ち並び、人々が買い物をしているのをちらちらと見える。人々が群れる中、いかにも怪しげな一人は黒いマントを着て、フードを被つてずるずると引きつきながら歩いていた。昨夜の泥棒と思われる少年だった。当の人々はその正体をまだ知らないのである。歩く度に、あちこちから人々の噂が聞こえた。ビニールの買い物袋を

たくさん抱えた大柄なおばさんが、通りすがりに友達に話しかけるのを、その少年の耳にはつきりと聞こえた。

「ねえ・・・聞いた？昨夜に、またあのグルーミの屋敷に泥棒が入ったですって。きつとあの例の盗賊団の一味の仕業だという噂よ。」

「まあ！大胆なこと。あの屋敷に入るなんて、死に行くようなもんよ。例え、宝が手に入れても、犯人が分かれば・・・」

それを聞いたその少年はなるべくその話を聞かないように足を速めた。突然知らないうちに誰かの肩にぶつかると、「おい！気をつけろよ、小僧！」と見知らない男に注意された。たが、その男はそのまま立ち去ったのである。あらためて少年はどこかへ向こうかのようについているうちに、道端にあった小さな八百屋からおばさんがその人に話しかけてきた。

「やあ、あんた。今朝のうわさをもう聞いたかい？昨夜、あのグルーミの屋敷にまた泥棒が入ったですって。かなりと屋敷は大騒ぎして、町中までその犯人の調査に来ると聞いたわ。もう、知っているでしょう？捕まえれば、かなりとお手柄だと思うがね・・・」

それを聞いたその少年はその場で立ち止まると、ぎくと表情が変わった。だが、その人はフードで顔を被っていたため、周りの人からその少年の表情を伺えなかった。

「おばちゃん！今はそんな冗談よりも、早くそのドアを開けてよ。俺も、いろいろと急いでいるし・・・」

そうつぶやいた少年の背後に、「財布泥棒、どこだ！」とわめきながらその泥棒を追いかけると思われる一人の男がその少年のそばに通り過ぎた。さつき、歩く途中で知らない人の肩をぶつかったあの男だった。気が付くと、その少年はいつのまにか早業でスリをしたのである。その少年はさらに顔を隠すように、おばさんの視線をそむけた。それに気づいた目の前にいたおばさんは微笑んだ。

「あ、なるほどね。今度は、それねえ・・・ま、いいわ。早く入りなさい。（静かで低い声に変わると）また捕まえないうちにね。」

「悪いな、おばちゃん。また今度おごるよ。」

「はいはい。そのうちにね。」

おばさんは背を向けると、目の前にある建物のドアを開けた。少年は頭を少し下げると、急いでおばさんの後をついていた。おばさんはその少年にお別れの挨拶をすると、すぐに商売に戻った。少年はそのドアにこっそり入っていく。誰も気が付かずに。

そびえ立つ建物のドアを入った瞬間、辺りは薄暗かった。だが、その少年は先に進む道を知っているからのように、ひたすら奥へと進んだ。万が一のため、転ばないように壁を手で支えながら歩き、そして角に曲がった瞬間に、地下へとそびえる階段にゆっくりと降りた。やっと地下に着いた少年は、目の前にある木の扉を開くと、辺りがぱっと明るくなった。そこにはかなりと広い部屋で、天井にくっつかの天球が照らし、辺りに人々の賑やかさと歓声が上がる。そこには、長いカウンター形式ののテーブルの奥に顎ひげを生やしたバーテンがコップを布で拭いていた。あちこちに小さな丸いテーブルを囲んでいるのは、たくさんのならず者や泥棒、盗賊達が集まり、煙草を口にくわえながら洋酒を飲んだり、ランプなどでの賭け事したりをする酒場だった。ここを仕切っているのは、ある盗賊団。

その名は、‘タイグーニル団’。ジャック・ハウロールという有名な名を持つ盗賊の頭を中心に、この酒場をアジトとして盗賊などが集まる場所である。その盗賊の一味と思われるその少年は、周りの人を気にせずにカウンターに着くと、ようやくその少年に気づいたバーテンが不敵に笑みを浮かびながらその少年を暖かく迎えた。

「おお！ やつと来たか、チビ！ お前も、でかしたぞ。昨夜の話、町中でうわさになっているぜ。ここもそうだが、そのような大胆な行動をするのは、おまえだけだった・・・。みんな、知っているぜ。んで？ 何を盗んだ？」

‘チビ’とは、その少年は小柄だったため、みんなからあだ名としてつけたのである。

「（　　）なんだ・・・もうみんなも知ってたのか。）まあ、まあ・・・

・。そんな焦るなよ、バーテンのおじさん。まず、親分に言わないとな。また俺を叱りにくるしよ。あ、この間の続きのお説教だよ。」

「何をしたんだい？その、この間のことは……。」

「ああ……。教えていなかったっけ？この間、他のダチと前々と計画した屋敷での宝盗みでな。あの屋敷で俺は危うく正体にもばれて、もうお少し捕まりそうになったその説教だよ。その時は、親分が助けてくれたけど、その失敗が許せなかった。だからよ、俺のせいだったというわけだ。だから、俺は昨夜で、リベンジしに行ってきたんだ。一人でな。」

「はははは！こりや、すごいな。でもな、あの親方はチビのためだと思って叱っているから、少しありがたく思えよ。普通の部下じゃ、パンチかキックでも食らうよ。」

「けどよ……。めんどくせエよな、あのジジは……。ガミガミとうるさいし、人に関してもそうだし。酒ばかり飲んで、そこら辺の女と付き遊んでいるし。」

「酒くせエエロオヤジか？」

「そうそう！その一言というところ……って、えっ！……？いつのまに！」

その少年は思わず背後を振り返ると、そこには巨大な人影だった。親分と言われた六十代ぐらいのおじいさんだった。盗賊のお頭のよな格好をして、なにより印象に残るのは長い顎ひげと派手な虎の模様した赤いバンダナを頭全体に巻いていた。老齢のわりには引き締まってがっしりとした身体をしている。全身から発する威圧感が相手の大きさを何倍にも感じさせた。「あ、やつベエー！」と思わず少年はその場でタジタジとなって、フードがずれ落ちそうになった。そう、その盗賊のお頭と思われたそのおじさんは、あのジャックという名前だった。みんなから親分と従われる偉そうな人で、その同時にもその少年にとっては一番苦手な人物である。

「今度はまたあのゴルミの屋敷に行くとはな……。エドー！何度もやれば、気が済むんだ！え？おめエ、何様だと思っているんだ

！？」

その親分と思われるおじさんは表情に怒りに引きつると、少年を見下ろした。あんまりにも大きな怒鳴り声で、周りの者達は一斉に止まったかのように振り返った。エドーを呼ばれた少年はふてくされた顔で親分の説教を聞かされていた。面倒くさそうな表情を浮かんでいたエドーはフードを抜くと、素顔を現した。きれいな銀色の髪の毛は、ばさばさと逆立てるようにそろえ、前髪を上から垂らした。ちよつと切れ長の目をしていた少年だった。左の片耳に大きな輪のイヤリングと、顔には左の眉に向かって右目の下まで、鼻を横切った斜め線のような古い傷の痕がある。しばらく時が経つうちに、いつまでも親方の説教が続ける中、周りから笑い声と驚きの声が混じった歓声を上げる。いつまでも周りが盛り上がるのを見飽きたバーテンは、その親方をなだめようと、少年を見た。

「まあ、まあ、ま、親方も。そう言わずに、今日は多めに見てあげてな。チビも一人であのゴルミの屋敷からいい宝をもらっただけでも、いいじゃないのか？普通の大人じゃ、あそこに忍びのも、無理な話だしな。捕まらないだけでも、幸いだと思って……。今回はね……。」

バーテンはガラスのコップの上にはあはあと息を吐くと、布で急いで拭いた。それまで固い表情しか浮けなかった親分はしょうがないとため息をもらすと、エドーの頭上に手を置いた。エドーをにらむと、その場から立ち去ろうとした。親分が黙って背を向けると、鼻をふんと鳴らした。

「あんま、わしはおまえを認めたくないけど……。その宝、あとで見せてきな。わしもいろいろと忙しいじゃ。ほら、ベルーク、ホンジ！おまえら、仕事だ。いくぞつと！」

近くのテーブルでトランプをしていたベルークとホンジと呼ばれた盗賊の格好した男達は、「は、はい！」と返事すると、親分のところへ向かった。親分の左右に並び立つと、まるでボディガードのよくな巨漢な二人だった。右に立つ男は軽量なベストとハーフパンツ

を着たポーカークフェイスなベルーク、左に立つ男は簡素なタンクトップと長いズボンだけで、茶色の髪の毛をバンダナで額当てとしてまとめて逆立つ、目立ちあがりなホンジ。しばらくして、親分は奥にあるもう一つの出入り口のドアを乱暴にあげると、ベルークとホンジはエドーを振り向き、にこつと笑いながら親分の後をついて行ってしまう。おそらく、「またあとでな」というサインだろうか。ドアがぱたと閉めると、周りの人達はざわざわと騒ぐうちに、それぞれの場所であるテーブルに席をつきながら、また賑やか雰囲気再開した。

「命拾いしたぜ……。サンキュー、おじさん！」

「いや、いいんだ。それより、チビも、大変だな。盗賊の仕事をして……。」

「ああ、俺だつて小さい時からなれっこだからな。でも、少しぐらい俺を褒めてくればいいのにな、あのジジ親分も。俺だつてちゃんと宝を盗んだのによ……。今度は、山よりもでかエ宝を持ってくるっての！」

エドーはほこりを払って立ち上がりながら低くつぶやいていた。それを聞いたバーテンは笑った。

「うーん。間違いないな、これは。本物の宝石かもな、その石も価値がありそうだしうじゃな。でも、ま……。それにしても、よくやったな、チビ。」

低く唸つて言ったのは、親方だった。エドーが昨夜、ゴルミの屋敷から盗んだ首飾りを、親方の部屋で見せていたのは昼頃。親方がテーブルの上でその首飾りを鑑定した結果、その宝にも価値があると言い、なにげにエドーを褒めた。少し元気になったエドーは徐々に笑みを浮かぶと、いつのまにかエドーの隣にいたベルークとホンジもエドーを褒めたのである。

「前よりもましになったな、チビ？」

「こんちくしょ！エドー。でかしたぞ！」

二人はエドーの髪の毛をくしゃくしゃにすると、エドーは二人の手から離れようと必死だった。

「それで、親分？俺も、次の件にまけてくれよ。この間、言っただじゃん。もし、俺が宝を一人で手に入れたら、親分に盗賊としての腕を認めよう」って……。だからよ、頼むぜ！このとおりだ、親分！！ちゃんと宝を盗んでみせるからよ！」

ベルークとホンジからやつとの事で離れたエドーは手を合わせ、目の前にいる親分に向かって頭を少し下げた。その光景を見た親分は腕組みをしてうーんと低く唸った。その時、ベルークとホンジは一齐に頭を下げた。それに気づいた親分は思わず眉をひそめた。

「なんだい、お前達まで……。そんなにチビをあの件を出させてやりたいのか？え？あんな危なさそうなやつを？」

「はい！おれらからお願ひします、親分。チビにも、いろいろと勉強きるじゃないっすかね？何かあつたら、おれらがなんとかします……。はい、命でもかえて……。」

ホンジがそう言うのと、ベルークは頷いた。どうやらホンジと同意しているようだ。それを聞いたエドーはほんのわずかの期待を抱いて親分を見たが、表情を固くした親方の答えはそつけなかった。

「はあ……。まったく。今の若い人には、まだまだ分らないのか。いいか！？盗賊つつてもな、ただ宝とかを盗むだけじゃないんだぞ。世間では、わしらは単なる盗賊じゃが、本来はわしらは義賊。義賊とはどんなものか、知っておるか？」

「（　　また出たよ……。ジジのお説教だ。）ああ、そんなもん俺だつて分かるよ。」

「バカもん！お前のようなうまくいくヒヨコどもは単なる宝好きの盗賊だ。だが、わしらは違う。今この町に、グルーミの屋敷のような悪党は、わしらのような一般的な市民の金を奪うばかり。じゃから、わしらはこの盗賊……。じゃなく、義賊団を結成したのじゃ。」

「はい！まったくその通りです、親分！」

「でもよ、ジ……。じゃなくて親分。どっちにしても、宝や金を盗

むために行くんだろう?」

「違う、世の中はそんなに甘くないからじゃ!いくら宝好きでも、理由なしで、わしの許可なしで他人^{ひと}の物を盗んだりするのは、知つてとおりに、わしのルールの第二条を破ることになる。その時、どうなるか、もう分かっているじゃろうな?」

「第二条、第二条……。あ!第二条って、まさかあれですか!?!」

「なんだい、ホンジ?あれって?」

「知らないのか、ベルーク。第二条:もし親分の命令や特別の場合を除いて、理由なしまたは親分の許可なしで、他人から宝や金を盗んだ場合、親分から罰を食らう。その罰とは……。」

エドーは大きな唾を呑み込むと、ベルークが思い出したかのように静かに答えた。

「親分から十回のげんこつと、その金を持ち主に返し、処分はその持ち主が決める権利を得る。それと、親分の許可に違反した場合は、親分の名によりこの‘タイグー二団’を抜けさせると認める……。」

「そうじゃ。分かったか、お前達!それと、エドーも。分かったなら……、次は覚悟をするんじゃない。いいな、特にエドー!お前だ!次の件で、またこの間みたいに失敗したら、その第二条を破ることになる。分かったか?」

「はい、親分!」

「あ、はい!ジジ……じゃなかった。親分!」

それにしても、やっベエな!俺とした事が、あの時に財布を理由なしで盗んできたが。ま!いいか。ジジにバレなければ……。

エドーは内心でそう呟いた。あれだけは親分に知られたくないため、ただひたすら祈っていた。そこで、親分は立ち上がると、すぐにこの部屋から立ち去ろうとした。エドーやホンジの間を通り過ぎると、それに気づいたベルークはドアを開け、親分が黙って一人で外に出

た。外に出た親分を見て、慌ててホンジは親分を追いかけると、ベルークとエドーは一瞬に顔を見合わせた。突然、ベルークはにやりと微笑むと、エドーの背中を思い切りぽんと叩いた。

「いて！何するんだ、ベルーク。」

「よかつたじゃないか！お前も、あの件に仲間として入れてもらうなんて……。親分、あの方はそう言っているけど、本当はお前を認めざるおえないんだ。なにせよ、あの時の失敗後に、親分がお前と約束しただからよ。」

「約束？あ、ああ……。あれか。もし、俺が宝を一人で手に入れたら、親分に盗賊としての腕を認めよう、ってやつか。」

「親分はどんな約束を守るお方だからな……。あの方は義理と人情を守る義賊の偉い方だからな。それに明日朝早く親分がここで集まるでな。そこで、どこで何を盗むか、説明するからな。それじゃ、またな。」

そう言い残すと、ベルークは部屋に出た。誰もいない部屋に取り残されたボツンとしていたエドーは啞然として立っていたが、徐々に笑みが浮かべてくる。言葉を口に出さなかったエドーだが、心の奥から自身の腕前を認めた事を、みんなに感謝していた。盗賊の誇りとしての嬉しさが……。

第一話：始まり（後書き）

「Under Another Sky」ユウイの旅」という作品と同じく、少しずつ物語の人物紹介や世界観、話の後書きなどを載せますので、（まだ未熟なものです）よろしくお願いします。

第二話：盜賊団（前書き）

前回のあらすじ：

主人公のエドーは盜賊として、昨夜この町の家主で悪党なゴルミの屋敷で宝を盗んだことで、翌日に一時的の有名な噂に流れた。エドーが所属している盜賊・タイグニール団のアジトである酒場で、親分のジャックがその事で手柄を立て、エドーを一人前の盜賊（義賊らしいが）として認めたらしい。そこで、エドーが前々からジャックとの約束が今日果たしたため、次の宝盗みの件で仲間を入れてほしいという願望した。同じ盜賊仲間であるベルークとホンジも頭を下げたまでも、親分にもお願いする事に。そして、頑固だったジャックはそれを認める事に……。

第二話：盗賊団

翌日の朝、酒場は静まり返っていた。あれだけ昨日に、わいわいと騒いでいたならず者達はここにいない。バーテンはカウンターを布巾で拭くと、あちこちの小さなテーブルは輪のように置いていた。小さなテーブルに囲まれた中心には、広々とした床。そこには、数十人かの盗賊達は集まっていた。エドーは相変わらずマントを着て、フートを被っていた。表情からうかがえないが、腕組みをして周りの人達の様子を見ていた。エドーが見渡す限りでは、カウンターの所で立っているベルークの姿が見えた。床の上であぐらをかいて座るホンジもいれば、テーブルの上に座って欠伸をするクンジもいる。クンジはホンジの幼なじみで、はげ頭が特徴である明るい人。彼らの年が近いこともあり、エドーの感覚をよく理解してくれる兄貴分のような身近な存在である。だが、よく子供扱いされるが親しい友人でもある。気が付くと、煙草を吸って壁の隅で、寂しさを漂いながら一人で立つ女性がいた。どうやらこの盗賊団では紅一点であるらしく、近づく者はいないという。その他の人達は、雑用のような手下達だが、エドーとは長年の顔見知りである。彼らは、親分が来るのを待っていた。エドーは待つのに疲れて、思わず欠伸して寝ようとした。その時、突然外から出入り口を乱暴に開くと、周りの人達はその出入り口に一斉に注目した。そう、彼らの盗賊団の頭であるジャックが現れたのである。

「よし、お前ら！！今日の仕事の件を説明するぜ！今日は今までよりも、もっと過酷で大変な仕事だ。志をしてよく聞け、じゃが聞いて驚きなよ。」

ジャックは真ん中に立つと、辺りを見渡した。周りの人達は、自分の親分を視線を注ぐ。だが、エドーだけは欠伸をしながら、呑気な口調で口を開いた。

「親分！またどうせあの屋敷に忍び込むでしょう？大した・・・」

「こら、エドー！よく、人の話を最後まで聞け！」

「はいはいっと、親分。」

ジャックはエドーのぶっきらんな態度を見て、思わず怒鳴り返そうとした。だが、近くにいたホンジはジャックの背中を突付くと、小さな声でささやいた。

「親分！チビをほっといて、話を次へ・・・」

「ああ、そうじゃった。いいか、お前ら！次の仕事は、ある宝を盗むこと。じゃが、それが実在するかは、不明じゃがな・・・。どういふよりもなんだが、まずお前らは『世界の伝説』の話を知っているよな？」

「ああ、俺も聞いた事があるような気が・・・。」

「そういえば・・・。あの伝説の話だろうがよ。世界創造からの争うをある力で治めたやつでしょうが」

ホンジがなにげに言うのと、クンジは心当たりがあるかのように答えた。それを聞いたあちこち周りの者達からざわざわと騒ぎ始めた。

そこで、エドーは手を上げて、質問の確認するためにジャックに尋ねた。

「『世界の伝説』って、昔三つの世界に分かれていた三つの種族が互いに争いをして、その時に神様がいたんたっけな？神様は、『時のなんとか』を創って、時と共に世界を一つになって、争いを終わらせたというおどき話だろう？」

「おどき話までではないが、ま！そうじゃな。『時の魔術師』と呼ばれた時の力を持ち、時代が流れることに、世界はこうして一つになった。じゃが、その伝説の話は、実在するかはどうかは・・・。とにかく、わしはその事を興味を持ってな、それを調べるうちに、わしのある古い友がある事を見つけた。その伝説の中に、何かお宝のようなものがあるかもしれないと言っていた。その『時の魔術師』は時の力を持っていたから、何か遺産のような宝があるかもしれないと確信したのじゃ。だが、残念ながらこれからわしらが盗むのは、

その宝に関する物のヒントじゃ。なぜなら、いくらわしらでもそれに関する情報が少すぎる。」

「でも、それは伝説だろ？ジジ・・・じゃなく親分！」

「だからわしはそれが実在するかは、不明だと言った！じゃが、伝説の宝などがこの世界に眠っていることが確かなんじゃ。わしの考えではな、たとえそれが伝説だと知っても、あり得ないと言われても、それを捜す価値があるじゃろう？それが盗賊というもんじゃが」
「なるーほど。でも、ちよつとまった、親分！！だって、それは伝説の宝に関するヒントなら、どうやって見つけれ・・・」

「じゃから、話は最後まで聞け！わしの情報によると、ここから山と森を抜けてすぐに『バサーム（町）』にある金持ちな貴族、ま・・・あの悪党なゴルミの友人らしいが、その『ブルーノ・ベン・ハック』という伯爵が持っているらしい。その男の屋敷に保管していて、自分の美術品や貴宝などをコレクションとして集めていると聞いている。だが、やつのコレクションは世界中でいるんな所で、勝手に盗んだだけなのじゃ。その中に、その『時の魔術師』の遺産に関するヒントの宝があるのじゃ。やつらはそれがそんなにすごい宝だと知らんが、かなりと値段が高くつくと思われた貴宝でな、もちろんやつらの警備は厳しい。じゃが、そんな事でわしらはくだばる盗賊団・・・じゃなく義賊として、あんな宝を手に入れるためなら手段を選ばぬ悪党から盗み出しに行くのじゃ。あの伯爵もかなりと冷酷な男でな、なにせよあのゴルミの仲間。あいつらに捕まったら、おしまいじゃ。質問は？」

周りから手が挙がる事がなかった。だが、突然壁の隅で立っている女性が、煙草を吸いながらもちらと手を上げた。それに気づいたジャックは、その者に向かってあごをしゃくった。

「なんじゃ、ミシエルのお嬢さん？」

「ちよつといいかしら、親分さん？その町に行く前に、まずどういうふうになその屋敷に忍ぶつもりなのですか？こんな大勢だと、大変な荷物になりますけどね。」

質問をしたのは、ミシエルと呼ばれた若い女性だった。その格好は明るい色で、ひらひらとした薄い袖のついた上着と長いスカートは、他の盗賊とは好対照だったが、それはこの盗賊の中での紅一点の存在であることを示している。エドーが今まで知るかぎりでは、ミシエルは、見た目では息を呑むような美しさだが、意外と男性顔負けの気の強さを持っていて、表情から冷酷な性格に見られがちなため、周りの男達もミシエルだけは逆らえないという。

「うむ。その質問は、その町へ行きながら説明する。以上だ！だから、お前らも覚悟はできているな！？」

「（エドーは大きく伸びすると）はーいっと、親分。」

「よし、行くぞ！お前ら、早く準備だ！」

「おおー！！」

周りから一斉に声を上げた。その同時に、人々はざわざわと解散すると、それぞれその町に向かうための準備を始めた。彼らは、ジャックからいろいろと話を聞くうちに、外に出て行く。当のエドーは「ふーん」と人の話を聞いていないのか、つまらそうに鼻を鳴らすと、突然背後から誰かが話しかけた。

「エドー・アルフォード！！こんなところで、サボるではないぞ！さつさと準備にせんか！つとだぶん親分はそうやって怒鳴るかもなお前も、こんな危険な件をやるから、少しぐらい気合を入れないのか？と思うがな。」

エドーは振り返ると、ベルークだった。いつのまにか親分や他の仲間達は準備が済んだのか、とつく外に出たらしい。酒場にいるのは、エドーとベルーク、カウンターでグラスコップを拭いているバーテンだけだった。エドーが浮かない顔を見ると、ベルークは心配げにエドーに話しかけた。

「何かあったのか？」

「うん？いや、いや、違うっての。俺は、あんな伝説の宝が身近にあるなんて、思ってもみなかったしよ。なんか、うそ臭い話だしな。俺もバカじゃねえから、思っていたけど。いくらなんでも親分が急

にそれを見つけたのは、そもそも怪しくねエか？」

「なかなか賢いな、今日のチビは。確か・・・そうだな。『そんな事に言われても、親分はそう言ったから、そうじゃないのか？それに、その宝を手に入れたら、おれらも有名人になるかもな！』・・・と昨日からホンジが親分の言葉を半分信じて、半分冗談な事を言っていたしな。俺もチビのように、親分に『そんなうまくいく話はあるか？』とか、『ゴルミの一味だから、そのブルーノからの罠かもしれない』と何度も止めてみたが、結局はだめだったな。だが、その確かではない証拠がないなら、実際に確かめにいくしかない・・・』とそう言ってたからな、いつもの親分は」

「おい、チビ！早く、行かないと・・・あいつらに置いてかれるぞ。それに、ベルークもね。」

バーテンが静かに言っていると、ベルークは承知したかのように低く頷いた。そこで、いつまでもその場で座るエドーを、ベルークは意地でもエドーの腕を引っ張り出すと、エドーは小さな悲鳴を上げた。

「い、いてて・・・！分かったよ、行くつて、行くよ！！でも、俺は隣町とか、行くのも久しぶりだな。」

呑気なことを言うエドーとエドーの腕を引っ張り出すベルークは外に出ると、バーテンは「気をつけてな！」と大声で言ったのを聞こえた。

酒場の裏口から出たエドーは、ベルークといっしょにある場所に向かっていた。建物と建物の間にある薄暗い狭い道で二人で並んで歩くと、エドーはベルークに尋ねた。

「それでよ、ベルーク。俺達は、あの『フェーザライダー』に乗るのか？」

『フェーザライダー』とは、この世界では一人また、二人乗りのバイクのような乗り物だ。車輪ではなく、60cmも宙に浮いて後ろに付いてある小さな風車を回りながらジェットのように走り、約100mp/sを持つ高速なスピートを持つ浮遊するバイク。その原

料はガソリンのようなものではなく、大量な物理的なエネルギーを持つ石、‘オーラ・ストーン’でまたは、‘光魔石’^{こうませき}という。その石はこの世界の生活に必要な原料の源であり、豊かな文明発達したのもその石のおかげである。その石の数が多いほどかなりと馬力を出す、使えば使うほど、その石の形は削り取り出し、徐々にエネルギーがなくなるということになる。また、この世界ではその石で電気、火、ガスなどを起こさせる役割もある便利なエネルギーでもあった。

「いや、それも予備としての乗り物を使うが、こんな多人数で一人ずつバイクを乗ってたら、変えて怪しまれる。だから、行く時はいつきにその町まで運ぶ、飛空艇に乗っていく。もちろん、観光客という身分でその町に行く。身分証明書など、もうすでに作つてあるから、そこに着いてから、また親分の説明があるからな。それに、あんまりここで話すと、誰かにばれるとやっかいだからな。」

「・・・ふーん。」

ベルークは徐々に低い声でつぶやくと、エドーは頷いた。しばらくして、二人はその細い道に出ると、突然目の前は町から少し離れた広がる草原の土地だった。そこには、いくつかの架空的な飛空艇が泊まってあり、その近くに管理の倉庫と思われる大きな建物がある。‘飛空艇’とは、‘フエーザライダー’と違って、船体にエンジンの中に飛ぶ必要なエネルギーである光魔石を燃焼してその熱で生成されたエネルギー、船の後ろに付いてある羽風車をその動力でまわして空飛ぶ船である。他の飛空艇と違って、ジェットエンジン付きでさらなる高速航行可能。だが、それらのジェットエンジン（普通のエンジンとは別）は蒸気機関で作られ、かなりと光魔石を費やるため、出発以外しか使わない。エドー達が乗る船は長年、ジャックが愛用している盗賊団・タイグーニル号と呼ばれる飛空艇でもある。二人はこれから乗る巨大な飛空船の泊まっている場所に向かうと、そこには何人かの盗賊達が準備していた。彼らが着ている服は盗賊のようなならず者ではなく、一般的な町にいる普通の格好だった。エ

ドーは一瞬知らない人達だと思った。その時、飛空船に乗っていたジャックがひよこりと顔を出し、下にいる連中を見下ろした。ふつと気が付くと、エドーの姿が見えたのである。

「こーら！エドー！お前も、少しぐらい手伝んか？いくらチビでも、お前も仲間として数えているんだからな。そこ、ベルークも！さつさと他のやつと手伝え！」

ジャックは、歯をむき出してエドーとベルークの方向をにらみつけると、大声で怒鳴っていた。その声を聞こえたエドーは、思わずタジタジとなって、慌てて飛空船へと駆け出した。それを見たベルークは思わず苦笑いを浮かべながらも、他の仲間達の手伝いに入る。

風が静かに吹き、草むらがそよそよと揺れる。突然草むらの揺れが少しずつ激しくなり、強い風に吹き飛ばさせる。そこには、飛空艇の底から溢れ出す白い煙。ジェットエンジンによる動力で、いくつかの巨大な円筒形の金属製の筒から煙を放射する。その煙が地面を叩くように発射し、その同時に飛空艇の後ろに付いていた風車が大きく回り始め、少しずつ飛空艇が宙に浮いていく。飛空艇内から人々の掛け声や合図が聞こえ、じたばたと床に急いで走る足音が聞こえる。そして、船の奥の部屋からエンジンのような発動する音が徐々に伝わり、部屋全体が熱くなる。その部屋にエンジンの担当をする者達は汗が頬に伝わっても、さし状のシャベルを手に取り、近くに置いてあった石炭と思われる光魔石を必死にすくったり、そのジェットエンジンの近くにあるボイラーの中に入れていくようだ。そのボイラーから発生する蒸気は、煙に変わって放射し続ける。飛空艇は徐々に上空し、10、80、500、1000メートルまでも昇る。1200メートルに昇った時点で、今度は風車が大きく回ると少しずつ前へに進んでいき、あちこちに散らばる雲が通り過ぎていく。盗賊達は、やつとの事で落ち着くと、飛空艇を運転する以外の残りの仲間達が自由の時間になった。飛空艇の中には、狭いがいくつかの部屋がある。例えば地下の内部にいくと、キッチン、いく

つかの寝室や貨物室。ほとんどの人達はその各自の部屋で、トランプや賭け事などと楽しんでいるようだ。そこで、一番広い部屋は上甲板であるキャビン（舵の操縦室も含め）と会議室でもあり、広間である。

「よし！お前ら、これから作戦を説明するのじゃ。早く広間で集まれ！」

しばらくして、飛空艇が安定になったことを確認したジャックは、キャビンの窓から顔を出すと、大声で皆を呼びかけた。一瞬その声を聞いた上甲板にいるほとんどの人達は、すぐに広間へ駆け出した。なぜなら、親分の命令だけは逆らえないのである。気が付くと、エドーだけは樽のところに寄りかかり、欠伸びながら呆然と空に流れる雲を眺めていた。まるで、ジャックの言葉を聞いていないか、大きく伸びをした。

「いいよな、雲つてのは……。自由で、こうして体を伸ばすと、気持ちいいねエ……。」

「こーら！！何をしている、エドー！お前も、早く集合せんか！いつまでものんびりと過ごすな！！」

「はいはいと、親分。」

ジャックはいつまでものんびりと過ごしているエドーに向かってあらんかぎりの声を張り上げた。その怒鳴り声を聞いたエドーはぶっきらっぽそうに返事すると、大きく伸びをしながらゆっくりと立ち上がった。

日が昇るころ、飛空艇はまだまだ空の上に飛行中である。広間に集まったのは、10人ほどの盗賊達。主なジャック、エドー、ベルーク、ホウジ、ミシエルと他の雑用的な盗賊のほとんどが顔をそろえていた。ジャックは長いテーブルの奥に座ると、皆も同じくその周りに座っていた。

「よし、お前ら！これからやる作戦を説明する！まず、知っているの通りに、わしらは普段の格好をしてある変装するわけだ。もち

ろん、この飛空艇に乗ってやってきた観光客ということだな、そのほうが早くで、すぐに町に入りやすい。」

「でも、親分。どうして、そんな必要があるんだ？」

エドーの問いに、ジャックは話を続けた。

「それはな、最近あの町でもかなりと盗賊達に対して警戒があるらしい。おそらく、ゴルミのやつが自分の宝を盗賊に盗まれ、その警戒をそのブルーノ伯爵に伝えたんだろうな。エドーのおかげでな。」

「ギクツ！ やっぱ俺のせいかい、親分……。」

「当然の事じゃが、ここで言い争うでも始まらん。それはそうとして、わしらは、その町に着いた時点で、取り調べがある……町に入る所だな。そこで、観光客という身分を持つわしらは、ブルーノの屋敷の中で観光するのじゃ。偽の身分証明書など、もうすでに作ってあるからな、すぐに入れる。それで、ちょうどこの時期はわしらにとつてありがたいのじゃ。それは、バサーム町内で行われるお祭りがある。ま、単なる大きなバザーに過ぎんが。」

「どうしてそれが、好都合がいいんだ？」

またエドーの質問だった。ジャックはがつくりとその質問にあきれたように肩を落とすと、ホウジに水を向けた。

「いいかい、チビ！ お前も盗賊としての常識を知っているが、もう一度おれらが説明する。（隣にいたベルークに向かってあごをしゃくると、ベルークは頷いた）お祭りつてのはな、人がざわざわと集まる。……でことは、万が一おれらは屋敷で宝盗みに成功しても失敗しても、その大勢の人達の中に巻き込めば、あいつらだって見つけにくい。だから、逃げやすいというのだぞ。」

「俺達は、たとえ屋敷内で正体がいづらにばれたとしても、屋敷にさえ出れば、こちらが有利となる。皆それぞれバラバラとなつて、少しずつ飛空艇に戻る。やつらの行動を確認しながら、こっそりと行く。万が一の場合は、フェーザライダーに乗ってとんずらしかなのである。いいな、チビ？」

「お、おうよ。分かったぜ、二人とも。」

エドーは腕組みをして一人で納得すると、ミシエルは手を少し上げて、親分に質問した。

「つまり、親分さん？この人数で分かれて、一つのクループは観光客としてあいつらの目を盗む間に、もう一つのクループはその間に少しずつそのお宝を盗みにいく。それと、残った最後のクループはその町で待機して、帰りも待ちながら屋敷の辺りの様子を見たり、観光客として邪魔なやつを見張るとして。そして、私達以外の人達は待機ということでもいいかしら？」

「ああ、その通りじゃ。まずは、盗みに行く班じゃが、ベルーク、ホンジ、チビじゃ。」

「よっしゃー！やっとなの出番だな、親分。」

「エドー！話は最後まで聞けと何度も言わせるのじゃー！？・・・それと、観光客は無論、わしとお前ら（目の前にいる手下達の五人を指した）だ。わしらは、その屋敷内で情報集めじゃからな。それと、万が一のために、ミシエルとクンジは屋敷の外で待機してもらう。外から様子見をして、見張り役という事でな。それで、いいじゃない？」

周りは納得すると、それぞれ「はい、親分！」と頷いた。それを見たジャックは低く頷くと、いつのまにか手に持っている地図を取り出した。地図を広げると、一斉にその地図に注目した。ジャックは地図の上にミニフィギアの飛空艇をバサームの町の図形から少し離れた森の地形の所に置いた。しばらくして、周りの者達がその地図を観察する中、ジャックはあれこれと地図の上にいると町内の違った場所を分かれている棒の形をしたミニフィギアの人形が置かれた。おそらく、ジャックは彼ら達がどう動くのかを例えて、説明しながら置いたのであろう。作業を終えたジャックは顔を上げた。

「よし・・・。これからお前らがやるべき事を、しっかりと耳の奥まで聞けよ！」

「でもよ、俺だけが、わざわざ普通の格好しないといけないんだ。お前らだって、大した……。」

エドーはそうつぶやくと、マントを抜いた。そこには、フード付きのハーフコートで、膝の下あたりまであるハーフズボン。忍びのように軽やかなサンダルを履き、腰巻きにひらひらとしたマントをつける格好だった。エドーは斜めをしたベルトを肩の上にかけて、背後に武器らしい短い棒を装備した。そこで、黒い皮製のグローブをしっかりと両手にはめこむと、今度は腕まくりした袖を肘あたりまでまくりあげた。あの作戦会議から数時間後、飛空艇が町に着いたのは昼間だった。数十分前に、屋敷の前に着いたエドー、ベルークとホンジは屋敷に忍び寄るため、屋敷の近くにある森の中で身を潜んで、ジャックからの合図を待っていた。その待機の時間に、彼らは盗賊の格好ではまづいため、身仕度をしていた。だが、それはエドーだけが、まだ準備をしていないのである。

「そう文句を言うな、チビ。おれらだって、普通の格好したほうが、身動きやすいだろうに……。な、相棒？」

「いや、そういう意味じゃないと思うがな。」

ホンジがそう言うのと、ベルークはかぶりを振った。だが彼らは、いつも通りの格好だった。エドーから言わせると、二人は盗賊に見える格好だと言うが、どう見ても普通の格好である。

「つまりだ。チビだけが、いつまでもそのマントを着ると、盗賊という事にばれてしまう……。正体もな。あのグルーミの事件後、あいつらはマントを来た盗賊を捜していると今日の朝に聞いた。どちらかというと、どうみても怪しいよ、マントを着たら……。」

「つまり、マントを着たら、正体がばれてもおかしくない……という事か。」

エドーは腕組みをして大きく頷いた。そこで、ホンジは思い出したようにエドーを尋ねた。

「そういえば、前々から聞きたかったが……。チビはどうして、そのマントを着たり、フードを被ったりするのが好きなんだ？ いつ

も、仕事以外は・・・。」

それを聞いたエドーはぎくと表情が変わるが、その驚きの表情を隠すかのように強く口調した。

「盗賊というのなら、格好や顔を見せないでしょう、普通はよ。それに、何を着ようと、関係ないだろう？盗賊なら・・・。」

「ま、理由はともかくだ。エドー、それとホンジもだ。そろそろ合図も来るし、お仕事の時間だな。エドー、ホンジも準備はいいか？」
ベルークは振り返ると、二人は一斉に頷いた。

第二話：盗賊団（後書き）

エドー・アルフォード（18歳、男）Ⅱ 幼い頃から両親を亡くし、孤児であったが、6歳のときにジャックに拾われる。そのため、6歳以前の記憶が覚えていなく、素性は不明。盗賊団・タイグニールのメンバーの中では素早い行動の持ち主で、小柄で一番年少のため周りから「チビ」と呼ばれる。楽天的で自由奔放な明るさを持ち、人の話を聞かずにぶっきらぼうな態度を取る事が多い。子供なじみがあるが、時に想像がつかないほどの頭の切れさもある。常にマントを着るのは、盗賊としての誇りを持つ証であると本人は発言するが、本当は寒がりのためでもある。

第三話：宝（前書き）

前回のあらすじ：

翌日、エドーはジャックから次のある宝を盗むための話を聞かされた。それは、なんとあの‘世界の伝説’に関するヒントの宝はある者が持っていた。その名は、ブルーノ伯爵。伯爵が住む町に向かうため、飛空艇に乗っていくタイグーニル団。その町にはバザーが行われ、作戦に好都合なものだった・・・。

第三話：宝

タイグーニル盗賊団は飛空艇に乗って、バサーム町に着いた。それは、盗賊頭であるジャックはその町の支配者当然のブルーノ伯爵が持つお宝、あの‘世界の伝説’に関する手掛かりの宝を盗むためにやってきたのである。バサーム町は、ベリアーク町に似てヒューマ口族が多く住んでいる。商人や運送などの仕事を持つ大半な人々は、ほとんどマルバード族が仕切っている。そのため、毎年何回かバザーが町中で行われ、あちこち町から来た商人達はこの町に集まるという。だが、賑やかな祭りの奥に潜む影で、盗賊達がある作戦を実行中だった。

風がそよそよと葉を揺らし、長く並び立つ木々。昼間なのに、怪しい雰囲気が漂う大きな屋敷。バサーム町では、お祭りのようなバザーが行われ、人々がざわざわと賑やかに集まってくる。一列に並ぶ店には、多くの町の人達や観光客、商人達がいる。大勢な人込みの中に、ジャックとその他の手下達はやつとの事で目の前にあるブルーノの屋敷に着いたが、屋敷前の門にいる何人の警備たちに引き止められた。当のジャックは、何もなかったように偽の身分証明書を警備員に見せて、観光団と名乗った。ジャックの背後についてくる手下達は男女老人という格好した変装しており、ジャックにつられて観光に使うカメラやバックなどを持ち歩いてた。思わず彼らは警戒を張るものの、警備員達をちらちらと何度も様子見していた。それは、盗賊達は心から正体にはれない事を祈るだけである。だが、しばらくして警備員から説明を受けながらも屋敷に観光することに許可された。最後に門に入ったジャックの最後尾についていた手下である男は、突然背後からある一人の警備員が呼びかけた。

「おい、その観光客団たち！それともう一つなんだが・・・。」
一瞬ジャックと手下達は心臓が破裂しそうな緊張の表情を浮かべる

と、一斉に振り返った。

しまった！それでも、ばれたのか！！？

初めて焦りを感じたジャックは内心でそう呟いた。心に迫るたびに、額から汗が伝わる。だが、その警備員はなぜか自分の顔を指すと、静かにつぶやいた。

「俺もまだ新入りだけど、ぜったいにブルーノ伯爵さまの大切なコレクションを触れないくださいね。この間、別の観光客団がそのコレクションである壺を触って、注意する説明をしなかったのでカンカンと先輩に怒られた。もちろん今後、また先輩に言われたら、責任に取られちゃうからね。まあ、それはともかく……。気を付けて、楽しんでください！」

そう言い残したその警備員は自分のポジションに戻るために、その場から立ち去った。警備員達からの警戒をやつと逃れた手下達は、ほつと安心せずに、未だに固い表情を浮かべながらジャックの後についていく。もちろん、当のジャックは額に一筋流れる汗を拭くと、大きく呼吸して屋敷に入った。あの緊張感から逃れた安心感になったかのように、今度こそ気を引き締めて屋敷の出入り口に入るジャックと一味であった。

「どうやら危うくばれたらしいわ、親分さんも。」

そう言って振り返ったのは、ミシェルだった。エドー達がいる森の中ではなく、屋敷から見下ろす高台の上にいた。ジャックの作戦の通りに、ミシェルとクンジはその高台から屋敷や町の様子を見ながら待機している。

「親分はともかく、チビ達がうまくやらなきゃ意味ないし。でも、俺達もここで暇つぶしがよ？」

そうつぶやきながら、望遠鏡で屋敷を見下ろしていたクンジだった。そこで、ミシェルは腕組みして顔をそむけた。だが、固い表情を浮かべながらも、口もとが微笑んでいた。

「でもま！あの子達もなんとかできると、私は思うわ。なぜなら・

・あのチビのことだからね。」

「そりゃ、あのチビならあのコンビにとっては世話が焼けるほどですがよ。でも、珍しいですな。まさかあなたが心配しないというのは。親分以外は……」

「なーに。私はただそう思っただけ……。さて、親分の合図もそろそろ来ると思うわ。じょら！仕事をサボると、親分に言いつけるわよ。」

「はいはい、了解がよ！ミシエル譲さん。（　　）やっぱ、こいつだけは逆らえねエな。おまけにここで本性を現したら、さすがの俺も敵わないからだがよ）」

そう言いながら、内心で冗談を繰り返すクンジだった。突然ミシエルは立ち上がると、腰に手に当て、屋敷を見渡した。そこで、クンジは尋ねた。

「どうしたんですか、ミシエル譲さん？」

「何かおかしいと思わないの？そのお宝が、敵の屋敷にあるのだから、重要な仕事なのは分かっているけど……。こんな作戦がまさか私達全員で盗みに行くのも、雲をつかむような宝を取りに行くのも、あんまりにも話はうますぎるわ。それにあの親分、いったい何を考えているかしら？」

「マジがよ……。でも、俺はいつでも親分を信じるがよ。たとえ相手の罠だと知っても、そこら辺の宝をいただければいいじゃねエのか？盗賊らしく、とんずらすればいいがよ。」

「まあ、いいわ。とにかく私達もまだ仕事が残っているのよ、早く行くわよ！」

「ういーっすがよー!!」

ミシエルは背を向けると、クンジと共にその場から立ち去った。

一方、チビと呼ばれるエドー達は屋敷の裏から忍び込んでいた。屋敷の表なら、ジャック達のように警備員に引き止められるが、屋敷の裏なら、警備員が一人、そして二人しかいなかった。だが、も

うすぐ目の前の屋敷の裏で、森から抜けた三人達はすぐに茂みの中で隠れていた。だが、エドーは我慢できずに茂みを出ようとしたところ、ベルークに引き止められた。

「やっぱそう来ると思ったぜ。でも、なんていちいち、ここで待たなきゃいけないんだ？ 面倒だし……」

「そう早まるな、チビ！ まず、あそこでうろついている警備員達をどうするかを考える必要がある。たとえ、ここで殴り倒しても、また別の人に見つかったら余計騒ぎが起こって、警備がさらに固くなる。また親分にどうされるのか……」

ベルークは厳しい顔でエドーをにらむと、エドーの背後にいたホンジは口を開いた。

「それで？ これからどうすればいいんだ、ベルークよ。いつまでもおれらがここにいるても親分に申し訳ないぜ。」

「……しょうがない。ホンジ、チビ！ こいつらはお前らに任せる。

俺はもう一度図面を確認しないと……。だが、なるべく静かにな。」

ベルークはポケットから丸めた長い紙を取り出すと、ゆっくりと広げた。それは、屋敷内の図面であった。昨夜ジャックから頼まれた極秘仕事で、ベルークとホンジはやつとの事でこの屋敷内の仕組みである図面をどこかに盗み出し、今回の作戦を立てた重要な図面である。ホンジとエドーは顔を見合わせると、互いに頷いた。突然ベルークの目の前から風のように走り出した。ホンジとエドーと左右に分かれて、音もなく茂みの中で待機していた。そこで、ベルークから少し離れたホンジはポケットからなや小さな丸いボールを取り出し、すぐに二人の警備員の近くまで投げた。とんとん、とボールが弾む音を聞こえた二人の警備員が慌ててその音の頼りに駆け出した。すると、茂みの近くにあったのは単なる小さなボールだった。一人の警備員はそのボールをまじまじと見ると、隣にいるもう一人の警備員の男に話しかけた。

「おい！ なんだこりゃ？ そのボール……いったいどこから降って

きたんだ？」

「だぶん、あそこの森から出てきたじゃないのか？おそらく不審者がいるかもしれない。行ってみるか？」

「あつ、でも待って！こういう時というのは、やっぱり誰かが仕掛けてきて、その隙に背後から何者かが忍び寄る、とか……。まるで罠みたいに……。」

「そんな、まさか……。な」

とその警備員は笑った。その時、突然背後から人の声がした。

「だよな？気付くのも遅いねエ、おじさん達も。」

その不敵に笑う声が背中から聞こえた刹那、二人の警備員は後ろに振り返る同時に、背後から飛び襲いかかった何者かに、同時に蹴り倒された。それは、エドーの見事な二段蹴りを後頭部に決められたのである。顔面を地面に強打した二人の警備員たちは、悶絶したまま二度と起き上がらなかつた。エドーは振り返ると、さつきから茂みに隠れて、図面を読んでいたベルークとあのボールを拾うホンジが姿を現した。

「さすがのチビだぞ！見事な蹴りでしたな、えーい？また、騙し蹴り作戦……。いつでも上出来だ。」

そう言ったホンジはエドーの頭に手を置くと、二人は笑った。ベルークは相手を念入りに、二人の警備員達を手近な木の幹に縄で縛り上げると、いつまでも有頂天に続いているエドーとホンジに向き直った。

「さーてと……。ここで、もたもたする暇はないな。（図面を取り出し、二人の前で広げると）もう一度、この図面で侵入作戦を説明する。ホンジ、説明を。」

「はいはいっと、相棒。チビ！分かっているだろうが、お前の素早い足で屋敷（屋敷を指しながら）の最上階である三階まで登れ！おれらはあとで合図をしたら、すぐにお前はいつものようにとんずらするぞ。もし、お前がその宝を盗んだ時点でな。おれらはその図面通りに、屋敷内にいる親分達と連絡して、すぐにとんずらするぞ。」

もし、そこで親分やおれらの正体がばれたらな。とにかく！お前はあの凶面の通りの道に進み、あの部屋で宝を盗んだら、ここでおれらが待っているからなあ。急げよ、チビ！」

「おうよ、任せてとけつて。あとは、頼むぜ。」

そう言ったホンジはポケットから鉤爪に付いていた長細い縄を取り出した。それをエドーに渡すと、互いに頷いた。そして、二人がエドーのそばから離れるとエドーはその縄を弧のように思い切り振り回し始める。突如縄が屋敷の壁に向かって勢いよく投げ飛ばすと、屋敷の頂上にある鉄の柵に引っかった。安全を確かめるために、縄を引っ張り出したりすると、エドーは二人に向き直った。

「じゃ、あとでな。」

そう言い残したエドーは、縄をつかみながら壁に向かって足をゆつくりと踏み出した。その瞬間、エドーの身体は垂直に立つ壁の表面を、まるで地面でも歩くようにすたすたと縄をつかんで登って行った。エドーの様子を見守っていた二人は、いまや無事に屋敷の三階の窓に着いたエドーを見て安心すると、その場から急いで立ち去ったのである。

屋敷内の電燈は明るかった。廊下には、端に一列と並ぶ花瓶や絵、さまざまな装飾品がある。辺りの人の気配がなく、静かな雰囲気漂う。あんまりにも静けさだったため、慎重に廊下の奥に進もうとする小柄の人影が歩いている。エドーだった。やっとの事で窓から忍びこんだエドーは廊下の真ん中だと気づき、ベルークに言われた通りにある場所を捜していた。彼らが求める宝は、この屋敷の三階にある伯爵の書庫の部屋に隠しているという。エドーはそれを知ったのは、盗賊団の情報源であるベルークによる報告だった。窓から入り込んだエドーは、いつもの調子と違って、肌までもビリビリと緊張感が沸いてきたようだ。

「確か、あそこだったっけな？ずいぶんと怪しいもんだぜ、この屋敷も。（　　）　　よりも、うまく行きすぎだったの（　　）」

そう低く独り言を言うと、エドーは壁の左角を曲がった瞬間、急に立ち止まった。急いで背を壁に寄りかかり、横目でゆっくりとその角の物陰から何かを見つけた。そこには、たった一つしかない部屋の扉が奥にひそむ。エドーの脳裏からベルークが言っていた事、その部屋は間違いなく書庫であったと改めて気づいた。だが、その扉の左右には、警備員が見張っているのであった。

やっぱ、宝は邪魔者が付きものか……。出入口はどう見てもここしかないし、あの奥に窓ですらねエな。ベルークの言うとおりに、あんま、ここでもたもたする暇はねエーみたいだな。

エドーは警備員を見たたん、かなりと厳しい状況だと内心でつぶやいた。なぜならここでいくら殴り倒しても、宝を捜すのにも時間がかかる。その間に、援護が来たら、もはやあとは時間の問題だけになるのであった。その時だった。エドーが来た廊下から誰かの足音が近づいてくるのを聞こえた。誰かとは判断できなかったが、おそらく警備員だろう。エドーはもう一度確かめるために目を静かに閉じ、耳をさらに澄ますと、辺りを集中した。普段のエドーがそんなに冷靜的な判断を持つ持ち主ではないが、気配を感じることは誰よりも敏感だった。コトコト、とその足音が近づく度に、エドーは少しずつ焦りを感じはじめ、心臓の振動がドクンドクンと徐々に速くなってくるのが聞こえてくる。エドーは目を開けると、チツと舌打ちをした。

「ずいぶんと早いな、もう交代の時間か？」

向こう側の廊下から来た一人の警備員の姿を現すと、扉の前で見張り中の左側にいる警備員が言った。

「あ、はい！そろそろ時間なので……。」「

その警備員が扉の目の前にいた見張りの二人の警備員に慌ててそう告げると、もう一人の右側にいる警備員が頷いた。

「分かった。あとは、よろしくな。本当にこの見張り仕事もいいかげんに疲れたし。それじゃ、あとでな。」「

そう言い残すと、大きく伸びをしながらその場から立ち去った。左側の警備員が頷くと、その警備員に向き直った。

「それじゃ、今度お前の番だ。」

「えっ、はい？」

「うん？なんだ、まさかお前もまだ新入りなのか？・・・しょうがないや。さっきのあいつも二カ月前の新入りだったからな。それにしても、最近この屋敷も、どんどんと警備員を募集とは・・・。だぶん、最近の世の中も危なくなっただことだな。でも、先輩であるおれに感謝しな。なぜならお前が新入りだから、なおさらだ。まず、お前は書物の整理や確認をしてほしい。本当はおれの担当だけど、新入りであるお前にまかせる。おれはここで見張るから。整理ぐらい、できるだろう？」

「あ、はい！もちろんです、先輩！ばくに任せてください！」

その新入りの警備員は頭を下げると、扉をあげた。中に入った警備員は、振り返ると先輩である警備員は「それじゃ、あとはよろしく！」と言って扉を閉めた。扉を閉めたせいか、突然辺りは薄暗かった。だが、目の前が大きな書庫があったことに気づく。部屋全体に並ぶ書庫、壁に据え付けられた棚にはぎっしりと本や巻物などが並んでいた。新入りの警備員は念のために電気をつけようと思ったが、そのスイッチをつけようとしなかった。警備員のぼうしを外すと、銀色の髪の毛が逆立つ。その警備員の正体は、なんとエドワードだった。いつのまにか警備員に変装したのか、あの時廊下での出来事だった。それは、警備員だと分かっていたエドワードは、幸いにも一人だったため、密かに殴り倒すことができた。そこで、エドワードは見張りの警備員の事を考えた挙げ句、殴り倒されて気絶したその警備員の制服を奪いながらも、うまく本物の警備員のように芝居したのである。危うくばれそうもなく、警備員達は単純だったため、やっとの事でこの書庫に入ったのであった。

「本当、こんな芝居ぐらいで騙されるとはな・・・。取りあえず、あいつらに一つぐらい感謝しないとな。さてと、今度こそお仕事の

時間だ。」

さっきの危機を逃れて安心したエドーは、周りに並び立つ柵には目もくれずにベルークに図面で教えてもらったとおりに奥に進んだ。

「ベルークはここからだ知らないというけど、ま！自分で探すしかないか……。いったいどこかな？うん？」

エドーはあちこちと部屋中で探し回るうちに、ある柵の上に他の本とはわけて置かれていた一角の本を見つけ出した。

「なんてこの本だけ出ているんだ？」

エドーはその本を取った瞬間、突如本棚が動いた。徐々にゴトゴトという響く音が部屋中で伝わり、本棚自身が扉のように回転した。

「わあ！」と叫んだエドーはそこから少し離れると、その本棚は開いたのである。それは、隠し扉でもあった。それに気づいたエドーは、驚きの表情を浮かべながら、まじまじと見るばかりだった。

「マジか……。よ！まさか、隠し扉とは……。宝の話、親分の言うとおりありそうだな。その奥に……。うん！？」

エドーは扉の奥へと入ろうとしたその時だった。奥から誰かの走る足音が聞こえ、エドーに向かって駆け出してくる。扉の奥は真っ暗で、肉眼では見えなかったエドーは確かめようとした。突然人影が身を乗り出してエドーに向かって走り出したの気づいた。目を見開く瞬間もなく、エドーとぶつかった。

「わあ！！なんだ……。って、えーっ！！！」

エドーは勢いよく吹き飛ばされたすぐにエドーはほこりを払いながらも立ち上がると、顔を上げた。思わずそのぶつかった相手の姿を見て驚いたのである。そこには、息を切らせながら、力もなく姿勢を崩した少女だった。身体全体に白いマントに覆いかぶせて、頭上にフードを被っており、その少女の顔を伺えなかった。だが、その少女は少し顔を上げると、ツヤツヤとしたきれいな茶色の長い髪の毛を伸ばし、右耳から肩までの細長い付け毛がついてあるのを見えた。ノースリーブで胸のマークは針金のような紐で縛り、両腕にベルト付きのリストカバーをしていた。少女は立ち上がると、マン

トが少しつれ落ちた。ソフトな長いパレオのようなスカートを着ていたのははつきりと見たのである。ようやく事態に戻ったエドーは眉をひそめると、その少女をにらみつけた。

「って、おい！？なんだなんだ？いきなりぶつかるとは……………」

（まさかこの屋敷の人間か？そうだと知ったら……………」

「……………！？また追っ手か……………」

エドーの警備員の姿を見て、この者だと勘違いされたいらしい。その少女は嫌そうな表情を浮かべて背を向けようとして、慌ててその場から逃げ出そうとした。だが、次の瞬間。エドーはその少女の腕首をつかむと、強く引つ張った。突然に腕につかまれた少女は、青白い顔でエドーをにらみ返した。

「な、なにをするの！！は、離して！」

思い切り悲鳴を上げようとした少女は、突然エドーの手に口を塞いだ。だが、その少女はひどく苦しい顔をしてかぶりを振ったり、エドーの手から振り払おうと必死だった。混乱に落ちたその少女に対して、エドーは歯をむき出しながらシツと息を吐いた。

「シツ！静かにしろっての！大声を出したら、俺まで捕まっちゃうから。ほら、頼むから！俺も、今大変なんだぞ。あいつらに見つかる、と、宝盗みところか……………」

エドーが慌ててそう言つと、少女は一瞬、「えっ？」と疑うような表情に変わった。やがてエドーに対する警戒を解けたように抵抗をやめると、エドーは手をその少女の口からそつと離れた。だが、腕はまだつかまつたままである。その少女は厳しい表情を浮かべると、エドーをにらんだ。

「ここは、いったいどこの？どうして私が……………」

「はあ？俺も訳分からん！お前こそ、ここの人間じゃねエのか？それについてだが、お前？誰なんだ？宝つて本当に……………」

エドーが言い終わらないうちに、突然さつき少女が出てきた隠し扉から無数の足音が近づくのを聞こえた。どうやら隠し扉から何者かが急いでこちらに走ってくる模様だった。その足音を聞いた少女は

エドーの腕を振り払おうとしていた。まるで、誰かに追われていたように……。そこで、エドーは一瞬にその少女の腕を離れた。なぜなら、ここで言い争っても意味がないから、とそう判断したのである。その少女は一瞬にエドーの顔を見て戸惑ったが、やがてエドーから顔をそむけると、無言のまま走り出した。扉を乱暴にあげると、外に立っていた先輩の警備員が、呆然と振り返った。啞然とその瞬間を見守っていたエドーと外にいた警備員は、少女が書庫から飛び出して廊下へと走り続けるのを見ていた。だが、突然隠し扉の奥から何者かの姿がこちらに近づいてくるのを見せてくる。

　　「まったく！なんて次から次へとまた面倒くせエ事に巻き込まれんだ！？それに、どうすればいいんだっての、これから……………」
その瞬間、もはや焦ってしまったエドーは内心で迷っていたのである。ここでやつらに捕まられるか、それとも……………」

第三話：宝（後書き）

人物紹介　タイグーニル団のメンバー達：

ジャック・ハウロール（61歳、男）　盗賊団の頭で、エドーの育て親的な存在である義理と人情を守る義賊。自称は義賊として宝を盗むが、その部下たちはほとんどならず者や泥棒が多く集まる。そのため、常に部下とは厳しく、頑固な性格。だが、その裏腹に、部下達を暖かく眼差しや優しさに満ちていている。

ベルーク・クレイト（29歳、男）　常に沈着冷静で頼りになるリーダー格を持つ性格。ジャックの右腕として情報収集や作戦立てを担当するポーカーフェイスで、エドーの兄貴分として慕われる。時に辛辣な言葉を口調し、長年の相棒で行動派のホンジとは対照的に寡黙の友である。

ホンジ・オルディ（28歳、男）　エドーよりも前向きで明るい性格。ジャックの左腕として、仕事の準備や仲間集合などをかけ、場を盛り上げる賑やかな役を自称するが、ベルークから注意されるほど。エドーにとっても兄貴分で、エドーと気が合う。常にベルークとは行動を共にすることが多く、二人三脚のような仲。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8693a/>

約束の木～世界の伝説と時の遺産～

2010年10月9日03時04分発行